

本年は各処で三才児の保育を始めたことをきく。

三才の子どもは四才の子ども、あるいは五才の子どもとずい分いろいろの違いがある。四才の子どもは入園した頃から、もうかなりたくましく友達の間で遊ぶことができるのに、三才の子どもは入園してしばらくたつても、友達と一しよになつて遊ぶということがなかなかむづかしい。同じところで遊んでいても、お互いに関連のないばらばらなことをしている。

四才の子どもは同じ遊びをかなり長く続けることができるのに、三才の子どもは今やっていることと、次の瞬間にやっていることとはずい分違う。ふわふわと雲のように遊びが變つてゆくのである。このことは子どもが小さい程一層そのようである。赤ん坊の顔を見てみると、笑顔、泣顔、むつかしい顔、にやにや顔、と次から次へといろいろの顔をみせてくれる。瞬時のうちに表情がかわり気分が變る。よく見ていると面白いが、おとなはとてこれだけの気持の變化についてゆけない。三才の子どものときもそうである。あれだけの活動の變化、気持の變化になかなかついてゆけないのであ

る。

だから、三才の子どもが、十何人もいると、うっかりすると子ども達の氣持の變化を見逃しはしまいかということが恐しい。こちらで不注意に動くと、子どもの自然の動きに反することをしないかと思う。四才の子どもならば、おとなの氣ままにもかなり耐えられる。けれども三才の子どもを見てみると、彼はまだ余りにも弱く柔らかい。お母さんの膝のまわりからやつと離られる頃である。

三才の子どもの組をつくるときには、四才五才の組よりもつと細かな配慮、環境にも材料にも心づかいが必要である。幼児教育者の通念に従えば、子どもが小さい程その教育には骨が折れるし苦労が多い。とするならば、三才児の組は幼稚園の中で一番大變である。三才の子どもを四十人も一組にいれるというようなことは思ひも及ばないだろう。

おうちの子ども部屋をひろげたようなもの、三才児の組はそんなものではないだろうか。

今月は暑い夏であるのに、汗の流れるような編集になつてしまった。

九月号は例年のように保育学会の特集号である。

幼児の教育

第五十五卷 第八号

定価金五十円

昭和三十一年七月二十五日印刷

昭和三十一年八月 一日發行

東京都文京区大塚町三五

お茶の水女子大学附属幼稚園内

編集兼

發行者 津 守 真

東京都文京区大塚町三五

お茶の水女子大学附属幼稚園内

發行所

日本幼稚園協會

東京都板橋区志村町五番地

印刷所

凸版印刷株式会社

東京都千代田区神田小川町二ノ五

発売所

株式会社 フレーベル館

振替口座東京一九六四〇番

◎本誌御購読についての御注文は発売所フレーベル館にお願い致します。